

2024 年度自己点検・自己評価結果

項目	学校自己点検・自己評価結果・分析	2023	2024	学校関係者評価委員による評価
I 教育 理念 ・ 教育 目的 ・ 教育 目標	教育理念・目的・期待する卒業生像については、3年前の教育課程の改正により、教員間で意見交換したことで、意識の変化がみられ、各問の評価は高い。 〔課題〕 今年度は、新カリキュラムで学修した卒業生を輩出する。本校が力を入れてきた、看護のたしかな知識・技術・態度を有しあたたかい心で支援できる看護師の育成ができているかを評価しなければならぬと考えている。	2.8	2.8	・看護師国家試験の合格率により、新カリキュラムが機能しているかの評価になると考える。 ・期待する卒業生像「1. 人と人との信頼を大切にできる人」について、病院での看護師の応対、医師の言動を考えると、この卒業生像の観点はすばらしい。4) として「あたたかい心をもって 看護にあたることができる人」と追加してはどうか。 ・前年度と比較すると、評価は現状維持であるが、教職員の異動、学生の入替わりの中で同じ評価は全員で努力した成果だと捉えられる。 ・副学校長による南江堂（雑誌）への寄稿は、地域住民への情報開示として効果的、自己教育力につながると感じた。 ・新カリキュラムの内容は国家試験にどのように反映されているか。新カリでは1年次から地域に出るカリキュラムになっているため実習での学びはとても大きな経験力になると思う。 ・教育理念、目的・目標は今の看護に求められる、今の学生の資質にあっている、わかりやすい表現になっていると感じる。期待する卒業生像は3年間学び、どのように育っていくか、期待がよくわかる。 ・田植えの実習があると聞いて驚いた。しかし娘は

				実習を楽しんでいる。地域を知る、具体的な学習ができています。 ・教育理念、目的・目標は迷ったときに立ち返れる大切なもの、目指すべきところである。学生はどのくらいこれらを知っているか、意識しているか。学生が意識、理解できるよう伝えていくべきである。
II 教育 課程 経営	今年度教育課程について取り組んだのは、3年間のカリキュラム全体の評価である。まず実施できたのは、期待する卒業生像に向かう過程で、1年次・2年次それぞれの到達度を教員間で共有したことである。本来なら、カリキュラム作成時におこなっていることであるが、明文化されていなかったため、教員間での統一がされていないように感じていた。評価担当チームが「カリキュラムツリー」を作成したことで、明文化され、教員間での統一を目指している。 臨地実習においては、新しいカリキュラムでの3年次の実習が初めてだったため、実習先の所属長や臨床の指導者との連携を密にすることを目指し、臨地実習指導者会議等に教員が出席し情報を共有する、実習終了後に実習に関しての意見を聴くなど、実施してきた。それにより、課題が見え、改善できたこともあった。ただ、「臨地実習指導における学生の学びを保障するために教員の役割を明確にしている」の評価が低かった。これは、新たに教員として異動してきた職員や経験が浅い教員が、自己の役割に自信が持てないとの意見があり、今後の人材育成の課題である。 〔課題〕 カリキュラム評価は評価しなければならない項目が多々ある。現在、担当者を決め評価の予定を検討している。来年度はどの評価を	2.6	2.5	・学生の出願人数はどうか。卒業したら終わりではなく、その後どのように地域に貢献できているか、多様な働き方ができるような教育を考えてほしい、学生にも示してほしい。 ・現在は子どもから SNS を多用している。そのため国の指針に感化されて訪問看護や地域で…と言っているところもあるのではないかな。 ・以前は竹田というブランドの力が強かった。しかし、現状は、この学校が多様な人材を育てていくのか、竹田に就職する人を育てるのか、と二分化しているのではないかな。 ・過渡期にあり、カリキュラムの内容が非常に盛りだくさんに感じる。ある程度の臨床経験をした上で地域に行ければよい。 ・下郷町では看護師の訪問に医師が同行していて良いと思った。住民が看護師に信頼を寄せている。在宅看護の教育はしっかりやってほしい。 ・1年次、2年次のカリキュラムがうまくオーバーラップし積み重ねていけるとよい。

	行いカリキュラムに反映させていくか担当者を中心に進めていく必要がある。			・会津の文化を生かしたカリキュラムを取り入れるのはどうか。例) 酒文化を学ぶ授業
III 教授 ・ 学習 ・ 評価 過程	毎年の学校方針の中で、学生の自主性を育成することを提示している。転ばないようにするのではなく転んだ時にどう立ち上がるのかを考えさせる教育を目指してきた。現在の課題は自主性のとらえ方が各教員で異なることである。転ばないようにする教育観の教員も少なくない。 今回評価が低かったのは、「目標達成の評価とフィードバック」の各問いである。各科目の評価は、筆記試験、レポート課題、演習レポートなどで実施している。ここ数年は、レポート課題や演習の評価にはループリック評価表を使用している。教員からの評価だけでなく自己評価や他者の評価も受け成長できるようにもしている。教育目標の多様な評価方法や多面的な評価というところで、今後も教員間で共有しながら評価方法を検討していかなければならない。	2.7	2.5	・自己評価が高い今時の学生とのギャップを埋め合わせていくような過程があるとよい。 ・病院側も様々な評価がある。看護観、価値観もさまざまで難しい。何が大切かを伝える、本質まで探れるような評価方法が求められるのではないか。部署が違えば評価は違うこともある。 ・今の子どもは小学校の低学年から「自己評価」をしている。自己評価というものがわかり、自己評価力がついてきていると思う。続けてほしい。現場でも自信をもって行動できるのではないか。 ・評価のずれをいかに少なくするか。相手と対話できることも大切である。頑張っている学生にどれだけ具体的にフィードバックできるか。
IV 経営 ・ 管理 過程	財政基盤については、なるべく職員に情報を提供するように心がけているが、管理者自身も財団運営上の先の構想が見えない現状があり、伝えにくいところがある。それが、職員にとっては、施設設備等の様々な不満につながっているように感じている。 〔課題〕 学校施設を維持するしかない現状。新たな環境の整備（Wi-Fi、冷暖房設備の老朽化）が難しい。財団の将来構想を確認していくしかない。	2.5	2.3	・学ぶ環境は、学生、教職員いずれにも大切であるので、提案していったほしい。

V 入学	〔課題〕入学者の減少である。 今年度の対策として、社会人入学者の確保を目指した。従来は入学者の1割程度の社会人入学者がいたが、2024年度は1名のみであった。修学支援制度など社会人の修学を支える制度はある。在校生に確認するともっとアピールが必要との声があり、ホームページに社会人向けの情報をまとめて掲載したり、SNS 広告を発信したりした。2025年度は3名の社会人入学生を確保した。 来年度の対策として、9月に総合型選抜を実施することにした。この入試方法は、学力重視ではなく、本校のアドミッションポリシーに沿った人材の確保を目指す。それに伴い、高校訪問も会津地域にとどまらず、東北地方の高校を訪問する予定である。オープンキャンパスは毎年2回実施していたが、来年度は3回実施する。社会人向けには、イブニングオープンキャンパス：夕方からの相談等に対応する予定である。 18歳人口の減少、大学志向の傾向、など入学者の減少につながる課題は多々ある。選ばれる学校を目指し、今後もできることを検討していく必要がある。	2.7	2.8	・就職先は県立病院などにも流れている。竹田に勤めたいと思ってもらうためには財団をあげて育成し、魅力を発信しなければならない。選ばれるブランドという視点を打ち立てる必要がある。 ・就職した若い職員がやめてしまう現状を考えなければならない。 ・親世代にも向けてもっと広報活動をしてほしい。 ・SNS 広告は地道に続けてほしい。 ・今まで通り40人が入学するとは考えられない。子どもの減少が著明、小学校の学級の人数が減っている。学生を募集すれば来る時代は終わっている。志ある学生に入学してもらえるようにしてほしい。 ・募集にあたっては、例えば、将来にわたる福利厚生をアピールしてほしい。 ・日本人だけに目をむけていては学生の確保が難しい。10年20年後の学校の姿を考える必要がある。 ・病院には外国人実習生が入っている。学校でも積極的に取り入れてもよい。
VI 卒業 ・ 就業 ・ 進学	「卒業後の活動状況を評価し、教育課程に反映させている」について評価が低かった。新たなカリキュラムで初めて卒業生を輩出するため、来年度は卒業生の就職後の評価を実施できるように方法を検討し、その結果を教育課程にどう反映させていくかを考えていく必要がある。 今年度実施できたことは、ホームカミングデーの実施。今回で2年目になる。卒業し1年目の活躍状況やどの時期にどのように悩むのかなどが確認できた。それを基に学校が存在が役立てることは何	2.7	2.3	1年目の卒業生が対象だが、悩んでいる2年目の卒業生に対応できていない。卒業後も含めてサポートするのが学校の役割だと考えている。 ・離職防止として病院の研修管理室でも対応しているが、若い人は特に敷居が高いと感じるところもあるようだ。卒後3年位は学校で対応する窓口をもうけてほしい。 ・安心できる居場所がある、孤立しないように相談

	かを検討していく必要がある。また、筑波大学に編入学した2名の卒業生が大学を卒業するにあたり、専門学校での学びが大学で活かされたか意見を聞くことができた。その意見も参考にして教育課程への反映を考えていきたい。			できるところがあるというのは社会の中で大事である。
VII 地域 社会	新たなカリキュラムになってからは、地域への情報発信や地域への貢献を意識してきた。ホームページにとどまらず、SNS等を利用し、学校の情報を発信している。今年度は、地域の方に竹田看護専門学校の存在を知っていただくため、8月に「竹フェス」を実施した。入学希望者のみならず、地域の方々も老若男女問わずご参加いただいた。また、地域で行われるイベント（若松ガスのマルシェ、キッザニア会津）に参加させていただくこともできた。 〔課題〕地域の方々とともに活動できるような方法を検討する。	2.7	2.5	・田んぼの実習などの取り組みを竹フェスでアピールできるとよい。 ・ボランティア活動で地域に学習の場を広げていくのはよい。 ・ホームページは誰が作成管理しているか。学生目線で発信できるとよい。 ・TikTokを活用している会社もある。社長を巻き込んでいる。この学校で学んでみたいと思わせるような発信をしてはどうか。 ・看護学生が活躍できる場を増やしてほしい。中体連などの行事で応急手当をするなど、身をもって看護学校を周知する場面をつくってはどうか。
VIII 研究	3年前から、研究担当を決め、研究を進めてもらうようにした。その成果として、日本看護学校協議会学会で2年連続発表することができている。ただ、研究内容の教員間での共有を発表前にしか行っていないため、今後は研究計画書ができ段階で共有し、担当者以外も研究内容に興味を持ち協力していけるような環境にしたい。また、自発的に研究したいとの声も挙がっているので、それぞれが研究できる環境づくりも必要と考えている。また、興味・関心のある各学会等に参加するなど、教員の質向上を目指し、自己研鑽できるようにしていく必要がある。	2.2	2.4	